西田幾多郎の新カント学派批判と心理学

中嶋優太（石川県立看護大学）

本報告で主として扱いたいのは、西田が京都大学に赴任して以降、『自覚に於ける直観と反省』（1913-1917 年）、『意識の問題』（1918-1919 年）などで展開している、リッカートに対する批判である。『思索と体験』「序」（1914 年）で西田は次のように書く。

> 京都に来たはじめ、余の思想を動かしたものはリッケルトなどの所謂純論理派の主張とベルグソンの純粋持続の説とであった。後者は之と同感することによって、前者は之から反省を得ることによって、共に多大の利益を得た。（NKZ1:166）

西田哲学と新カント学派の関係としては、マールブルク学派のコーエンなど、他にも取り上げるべきテーマはあるが、京大赴任後の西田にとってリッカートの思想が大きな意味を持ったことは、上記の西田自身の証言からも明らかであろう。ただし、「之から反省を得る」というここでの西田の語り口は、この時期の西田のテクストを読んだ読者には、穏やかすぎるものに映るかもしれない。テクストでは、リッカートに対する一貫して批判的な、あるいはむしろ、対立的な西田の態度が表現されている。たとえば、『自覚に於ける直観と反省』の「改版の序」で西田は、この時期の自身の試みを「〔リッカートなどの新カント学派の〕価値と存在、意味と事実との峻別に対して、直観と反省との内的結合たる自覚の立場から両者の綜合統一を企てた」と振り返っているが、実際、この時期の西田は「意味即実在」（NKZ2:5）、「意味即事実（NKZ2:121）、「意味即作用」（NKZ2:292）といった表現で自分自身の立場を表現しており、そこには「価値と存在、意味と事実」を峻別するリッカートに対する対決姿勢が表明されているようにみえる。

「意味と存在」を峻別するリッカートと「意味即実在」の西田。さしあたって、このような対立図式で事態を捉えることは間違いではないだろう。しかし、それは一見して思われるほど単純な事態ではないかもしれない。本報告では、まず、リッカート自身の立場を押さえたうえで、西田が「意味即実在」というスローガンでリッカートに対抗するに至る経緯を辿る。そこでは、存外に、西田がリッカートの前提を認めていることに気づかされる。また、リッカートが意味と存在を峻別する背景には、心理主義批判があるが、西田自身も心理主義や心理学者に対する批判を行っている。西田とリッカートの関係は、心理主義者・心理学者という第三項を導入することでより立体的に見えてくる。さらに事態を込み入ったものにしているのは、この時期の西田が心理学者の議論を一律に否定しているわけではないという点である。たとえば『意識の問題』に収められた論文「感情」では、「すべて精神現象は意味即実在であって、Aktualitätsbegriff に依る実在である」（NKZ2:321）と語られ、「意味即実在」が「Aktualitätsbegriff に依る実在」と言い換えられているが、この「Aktualitätsbegriff」は心理学者 W.ヴントの術語でもある。

西田と新カント学派のリッカートおよび心理学者ヴントの一筋縄ではいかない関係性に分け入ることで、西田の立ち位置を今一度確認してみたい。